

# 2021 年度 創造的な教育実践

# 1. ゼミの武蔵の実践

## 1-1. 学部横断型課題解決プロジェクト

経済学部 助教 笠原 一絵

本授業は、2008年度に正規授業となり、本年度で14年目を迎えました。

2021年度は、前学期、後学期ともに1クラスを開講しました。前学期、後学期の学部・学科別の履修者数は表1のとおりとなっています。内訳は、前学期は、経済学部が4名、人文学部が8名、そして社会学部が9名の合計21名、後学期は経済学部が7名、人文学部が7名、そして社会学部が11名の合計25名です。男女比を見ると、前学期は男性6名、女性15名(男性比率28.6%)、後学期は男性6名、女性19名(男性比率24%)と、前学期、後学期ともに女性の履修者が男性を上回る結果でした。

本年度は、一前年度後学期・前年度後学期に引き続き、前学期の経済学部の履修生が4名であったため、フェーズ1は2名でのチーム編成となりました。

フェーズ1の2名という人数は、調査分析活動の質量にマイナスの影響があったと考えられます。そのため、本授業のもうひとつの目的である、チーム活動での学びや成長の機会、チームワークの形成やコミュニケーションにおける葛藤の機会が十分とは言えませんでした。しかし、フェーズ2では3学部が集まることでチームの構成人数も増え、チーム活動での学びは確実に得ることができました。

表1 2021年度学部横断型課題解決プロジェクト履修生(学科・学年・学科・性別)

学科	セメスター	前学期					後学期						
		2年次生		3年次生		学科合 計	1年次生		2年次生		3年次生		学科合 計
		男	女	男	女		男	女	男	女	男	女	
経済		1	0	0	0	1	1	0	1	1	1	0	4
経営		0	2	0	0	2	0	1	0	0	0	0	1
金融		0	0	1	0	1	0	0	0	0	2	0	2
英語英米文化		0	2	2	3	7	0	0	0	3	0	0	3
ヨーロッパ文化		0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0
日本・東アジア文化		0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	4
社会		1	2	0	2	5	0	0	0	4	1	2	7
メディア社会		1	1	0	2	4	0	1	0	2	0	1	4
性別合計		3	7	3	8		1	2	1	12	4	5	
履修生合計人数		21					25						

本年度も新型コロナウイルス感染拡大の影響により、大学の対面授業が全面的に再開される前までは、感染予防対策をとりながら、対面をメインとしてオンラインとのハイブリッド授業を実施しました。また、学生の多様な学習スタイルに柔軟に対応できるよう、授業外学習環境もオンラインと対面の両方の環境を用意しました。対面授業が再開された後は、すべて対面授業のみで実施し、最終報告会は一般視聴者にオンライン配信し、学生は企業担当者様を前に教室で発表しました。

特に1年次生と2年次生は、大学での授業の大部分がオンラインであったため、他者と協働して課題解決策をまとめる経験がほとんどなかったと思われます。そのため、対面授業において他者とコミュニケーションを行うために、どのように対応したらよいのか戸惑っている学生が通常の年度より多く見られました。

また、授業外での活動を対面で実施した場合と、オンラインで実施した場合では、明らかにチームワークの醸成に違いがありました。授業外にオンラインで実施する場合には、教員から「画面をオンにしてお互いの表情も確認し合うように」と指示を出しましたが、実際にはほぼ画面オフとなっていたことで、以下のような課題が浮かび上がりました。

- メンバーの表情が読み取れずに、チームワークが最後まで十分に形成できなかった
- 議論に集中できず、空虚な時間だけ経過していくというタイムマネジメントの問題が生じた
- 通信速度の影響により音声途切れると、スムーズな議論ができなかった

一方、授業外での活動を対面とオンラインを上手に取り入れていたチームもありました。例えば、フェーズ1で1週間に1回(週末)は ZOOM により、それまでの1週間の振り返り、次回の授業の予定確認と内容整理、翌週の活動予定、などを整理し話し合う場として活用したチームからは、ZOOMの活用が効果的であったとの意見がありました。

大学でのオンライン授業が今後も一部は継続する状況を鑑みると、授業外での活動におけるオンラインの使い方、他者とのコミュニケーションの取り方については、今後一層教員も工夫や改善を続けていく必要があることを改めて学びました。

さらに、対面においては、学生がメモをとる、検索機能では見えない事象に疑問を持つ、深い考察をする、汗をかく、相手と視線を合わせて議論するなど、オンラインでは得られない学びを引き続き重視していきたいと考えます。

このように、本授業では対面とオンラインを取り入れたハイブリッド授業を展開し、双方の長所を十分に活用できる工夫が今後更に必要となります。

本授業は2つの柱から成り立っており、一つが、課題提供企業の CSR 報告書の作成、もう一つが社会人基礎力の育成と自己評価能力を高めることです。

表2は、後者の社会人基礎力に関するデータになります。前学期と後学期を合わせた期間(通年)における履修生全員の平均値を見ると、受講前(事前評価)と受講後(事後評価)の間で最も伸びた能力は創造力でした(1.9 ポイントのプラス)。これは、チームでの協働作業を通して、メンバーの行動や考え方を観察学習していく中で触発され相乗効果が生じたこと、他学部の専門分野にも触れて多様な視点から柔軟な思考が醸成されるようになったこと、などが考えられます。他方、最も“伸びなかった”能力は規律性でした(マイナス 0.4 ポイント)。これは事前評価の段階で、12 項目の中で最も高いこと(事前評価で 8.4 ポイント)に注目しておく必要があります。これは興味深いことに毎年同じ傾向が見られます。学生は、この横断ゼミを通して自己と他者の関係性を理解することで「規律性とは本来何なのか」を知るのです。つまり正しく自己評価ができるようになった結果であり、規律性は“伸びなかった”のではないと考えられます。

表2 社会人基礎力の事前・事後自己評価【2021年度履修生】(学生による自己評価)

年度		2021年度		
カテゴリ/要素		事前評価	事後評価	差異(事後-事前)
通年⑫要素平均		6.5	7.7	1.2
1. 前に踏み出す力(通年)		6.3	7.8	1.5
①主体性	前学期	7.0	8.5	1.5
	後学期	7.1	8.2	1.1
	通年	7.1	8.3	1.2
②働きかけ力	前学期	5.5	8.1	2.6
	後学期	6.0	7.0	1.0
	通年	5.7	7.5	1.8
③実行力	前学期	6.4	7.7	1.3
	後学期	6.0	7.3	1.3
	通年	6.1	7.5	1.4
2. 考え抜く力(通年)		6.0	7.3	1.3
④課題発見力	前学期	6.2	7.7	1.5
	後学期	6.6	7.6	1.0
	通年	6.4	7.6	1.2
⑤計画力	前学期	5.8	7.3	1.5
	後学期	6.3	6.3	0.0
	通年	6.1	6.8	0.7
⑥創造力	前学期	5.4	7.6	2.2
	後学期	5.5	7.3	1.8
	通年	5.5	7.4	1.9
3. チームで働く力(通年)		6.9	7.9	1.0
⑦発信力	前学期	6.2	7.3	1.1
	後学期	6.3	8.1	1.8
	通年	6.3	7.8	1.5
⑧傾聴力	前学期	6.8	8.6	1.8
	後学期	7.6	8.1	0.5
	通年	7.2	8.3	1.1
⑨柔軟性	前学期	7.0	8.4	1.4
	後学期	7.5	8.7	1.2
	通年	7.3	8.6	1.3
⑩状況把握力	前学期	6.3	8.0	1.7
	後学期	6.5	7.4	0.9
	通年	6.4	7.7	1.3
⑪規律性	前学期	8.1	8.1	0.0
	後学期	8.6	8.0	-0.6
	通年	8.4	8.0	-0.4
⑫ストレスコントロール力	前学期	6.0	7.8	1.8
	後学期	6.0	6.6	0.6
	通年	6.0	7.1	1.1

\* 表は小数点第2以下四捨五入

社会人基礎力は、12の要素に分かれています。大きくは、前に踏み出す力、考え抜く力、そしてチームで働く力の3つのカテゴリに分かれています。この3つのカテゴリで見ると、考え抜く力は事前評価が低く、前に踏み出す力は上昇幅が一番大きかったという傾向が見られます。また、本年度は「ストレスコントロール力」の事前評価ポイントが例年と比較して低いです。ストレス社会の現代において、ストレスコントロール力を身に付けることは非常に大切です。「ストレスコントロール力＝苦しい時に前向きになれる力」と捉えれば、このコロナ禍においても必要な力だと考えます。

そして、不測の事態が起こる世に生き「頑張る」ことの価値が伝わりにくい世代と言われる現代の学生が、横断ゼミの履修を通じて、社会人基礎力の向上を実感し、学部ゼミでの活動や学外での活動を充実させたものにしていくことが期待されます。

本年度(2021年度)に課題を提供いただいた協力企業は、オリエンタルモーター株式会社、スガツネ工業株式会社、株式会社井口機工製作所、株式会社大崎コンピュータエンジニアリングの4社です。本年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策の影響で、企業のご協力自体が難しいことも考えられました。しかし4社とも過去に本プロジェクトにご協力いただいた経緯もあって、今回のご協力に至りました。学生たちは、協力企業に対して前回を超える成果を出すことで企業の期待に応えたいという熱意のもと力を結集して取組み、厳しくも温かい環境に恵まれた貴重な経験を積むことができました。

協力企業の担当者様は総じて、横断ゼミを通して本学学生を高く評価しています。毎年、歴代の協力企業(一部上場企業を含む)による採用実績が途切れないこともその成果と考えられます。授業後の、企業へのアンケート調査では、「アウトプットの質の高さから、学生たちの力量の高さを感じられた」「チームとしての小集団活動力の高さを感じられた」、「自社について客観的に見ることができた」などの回答をいただきました。

また、本年度もプロジェクト終了後の「振り返り」の授業内容を拡充して実施しました。これまでも当プロジェクトでは、「振り返り」のプロセスを重視し、キャリアコンサルタントとの面談や履修生間の相互フィードバックを実施してきました。様々な視点から、ポジティブ、ネガティブ両面を丁寧に徹底して振り返る作業は、この「振り返り」こそが成長において重要なプロセスであることを、学生たちに気づかせることを意図しています。自身の成長において他者の存在がいかに重要で貴重なものなのか、コミュニケーションの意味について認識を新たにした学生は多く、社会における企業の姿と、組織における自己の在り方を重ね合わせた、複合的な理解を促す授業であると言えます。

最終回の授業では、これまでの「振り返り」を未来にどう役立てていくのかを視野に、最後のチーム活動を行います。ゲストとして過去の履修生が登壇し、横断ゼミ終了後の学生生活や就職活動にどう役立てたのかについて話してもらうことが恒例となっています。履修生にとって「自分の未来像」を重ねる対象である先輩たちから、横断ゼミで培った様々な力を就活や卒論に発揮できた成功経験が「自分の言葉で」語られました。

ある4年次生は、「横断ゼミが学生生活で一番努力した経験にしてほしくない。その経験を生かして更に活動の場を広げてほしい」と伝えていましたし、また別の学生は、「コミュニティが違えば、自分が発揮する役割や強みが変化したので、ぜひ積極的に様々なコミュニティに所属して、本当の自分の強みを発見しそれを活かす場を増やしていくことを勧める」と話してくれました。

「横断ゼミ」という同じ経験を共有した学生の言葉は親近感と説得力があり、社会人基礎力という指標で内省を深めた共通の経験があるため、この時間は、このプロジェクトのスピリットが学生間で継承されていく重要な機会となっています。

このように、横断ゼミで学生自身が最も成長を実感することとして、「これまでの知識を自ら積極的に深め、応用することができるようになること」が挙げられます。横断ゼミは、大学での学びと社会での実践を繋ぐ、まさに「横断」の役目を果たしています。前年度から引き続き、横断ゼミを卒業した学生達が「横断ゼミを『横のつながり』だけで終わらせるのではなく、横断ゼミ卒業生達による『縦のつながり』を形成していきたい」という趣旨のもと、横断ゼミ後に挑戦したことや就職活動についてなど様々な話ができる場を開催するなど、学生団体の設立の動きにまで発展しています。学生たちの横断ゼミでの経験は、培った能力を柔軟に発揮できる場を学内外に積極的に求めて、自らの力で新たな行動を起こすことに着実に繋がっています。



飛沫防止のパネルが設置された教室で議論する学生の様子(前学期フェーズ1)



2021年度履修生が制作したCSR報告書

## 1-2. ゼミナール対抗研究発表大会(経済学部)

経済学部 准教授 蓮見亮

### <2021 年度「ゼミナール対抗研究発表大会」の概要>

本学のゼミナール連合会が主催する経済学部・ゼミナール対抗研究発表大会(通称「ゼミ大会」)は2004年の第1回より15年以上続く「ゼミの武蔵」を代表するイベントの1つとなっている。本年度のゼミ大会は12月11日(土曜日)に実施され、35チーム7つのブロックに分かれ20分間のプレゼンテーションを通して日頃の研究成果を競い合った。新型コロナウイルス感染症拡大の影響に伴い関係者のみの出席となり、学生へは質疑応答を含むゼミ大会の様相を録画した動画を学内限定のサイトを通じて後日公開した。

一前年度に引き続き、武蔵大学同窓会の企画による同窓会チャレンジ枠というブロックを設けた。このチャレンジ枠は、通常ブロックよりも応募要件を緩め、他学部の学生を含むグループ・個人を対象としたもので、ゼミを跨いだグループも応募可能となっている。本年度は計5チームの報告があった。

各ブロックでは、その専門領域に応じて選出された4名の審査員が①発表資料、②話し方・文章表現、③着眼点、④調査・分析、⑤論理整合性、⑥対応力の6つの観点から審査を行った。審査員の構成は、2名を実務界で活躍されている本学OB・OGに協力を仰ぎ、残り2名を本学教員で担当した。厳正な審査の結果、各ブロックの優勝・準優勝チームが選ばれ、それぞれ賞状・賞金が授与された。

ゼミ大会は発表のみに注目が集まりがちだが、それまでの準備期間で学生にとって多面的な教育的効果が見込まれる。発表テーマに関する専門的知識の習得、深化はもちろんのこと、学生は発表の準備段階における学生間での役割分担や作業を通じて、チームワークや問題解決能力を養う有用な機会を得ることができる。また、企業等での実務・社会経験が豊富なOBが審査員として含まれているため、プレゼンテーションには単純に学術的な正確性や理論的な理解と応用だけでなく実社会への応用性、さらにはより広い対象に理解を促すための能力が要求される。これらから、学生は通常の講義やゼミナール活動のみでは得られない経験、学習の機会を得ることができる。

本学のゼミ大会の大きな特色は、大会自体を学生自身が運営をすることにある。ゼミ大会は、武蔵大学ゼミナール連合会が経済学部教員や大学スタッフ等のサポートのもと、自ら企画運営を行う。そのため、ゼミ大会での大会運営に関わる学生には対外機関や関係者とのコミュニケーションが求められ、大会の準備は社会人として将来役立つスキルを養う過程としても機能する。

### <今後の課題>

本年度のゼミ大会は、前年度に引き続き新型コロナウイルス感染症の影響下にあったが会場実施とすることができた。もっとも、準備段階では開催日の状況を見通すことは困難なため、出席は発表学生、審査員及びゼミ指導教授のみにとどめ、懇親会も実施しなかった。その代わりとして、質疑応答を含むゼミ大会の様相を録画し学内限定のサイトを通じて公開した。

来年度は来場者を事前登録制とするといった対応をとることで、以前のゼミ大会の形態に近づけることができよう。緊急事態宣言の発令中でなければ、飲み物だけ出すような懇親会の実施は検討してもよいかもしれない。動画撮影及びサイト作成については、後から視聴できるという利点が大きいため、今回のノウハウを活かして来年度以降も引き続き実施してもらいたい。

前年度の報告書には、①参加ゼミナール数の増加、②外部の聴講者の増加を促す施策、③主催するゼミ連の体制強化、の3点を課題として挙げていた。①参加ゼミナール数は前年度27チームより8チーム増え及第点といえるが、学科間の偏りがあることはやや気になる。②については、外部からの聴講者の参加がないと緊張感が薄れ、大会自体から得られる学生の刺激も薄くなってしまうことが懸念される。オープンキャンパスでゼミ活動紹介などの企画を行うなど、外部へのアピールを図ることが求められている。ゼミ連としてもYouTubeやSNSを活用してゼミ大会を広くPRしたいという意向があるようであり、

それらの頑張りにも期待したい。

前年度もっとも懸念された③ゼミ連の体制については、本年度の新入生への呼びかけが功を奏した結果、多くの1年次生(夏時点では 42 名)がゼミ連に所属することとなった。一方で、現2年次生がおらず3年次生は引退のため、来年度は2年次生が中心となってゼミ大会を実施することになる。責任者となるゼミ連役員が経験不足であろうことは予想の範囲内であり、経済学部としてもゼミ連により多くの支援を行うことが求められよう。

< 出場チーム、及び発表テーマ一覧 >

ブロック	ゼミ名		テーマ
経済	二階堂有子2		女性活躍途上国
	広田啓朗2		コンパクトシティは観光消費に影響を与えるか
	田中健太2	○	教育は飢餓を救えるのか？－教育の食糧問題に対する効果の検証－
	根元邦朗 A		学力と投票率の相関関係
	大野早苗 A	◎	対外直接投資が日本企業に及ぼす影響についての実証分析
経済・金融 A	茶野努2	◎	個人情報漏洩が企業価値に与える影響
	徳永俊史2		Sell in May and go away?－新しいアノマリー投資の提案－
	中嶋 幹2		E スポーツの可能性
	蓮見 亮2		日本の所得格差を減らすにはどのような所得保障制度が必要か
	神楽岡優昌2	○	不動産投資信託 REIT は有望な投資対象か？
経済・金融 B	茶野努1		環境経営と企業価値間における関係性の有無 ～環境経営度調査を用いて～
	広田啓朗1		リサイクル率はゴミ処理経費に影響を与えるのか
	河合康夫1	○	シングル世帯も生きやすい社会へ
	根元邦朗 B	◎	投票とコロナ
	大野早苗 B		コロナ禍における株価分析
経営	伊藤誠悟2		意思決定時における非合理的要因について
	古瀬公博2		就職活動における「追求者」と「満足者」の比較分析 ー誰が「満足」を得られるのかー
	朴 幸佑2	◎	テクノロジーの進化と消費者の購買スタイルの関係性
	山崎秀雄2	○	困難な問題への対処法と心理的安全性の関係性
	高橋德行2		道の駅の成功要因-四万十とおわを事例として
経営・会計 A	高橋由香里2		フランチャイズ企業と収益認識会計
	目時壮浩2		管理会計の意義・役割の現場への浸透とその効果
	森永雄太2	○	多様性に向けた取組み
	山下奨2		アサヒグループホールディングスと麒麟ホールディングスの財務分析
	海老原崇2	◎	不正会計とコーポレートガバナンスとの関係



経営・会計 B	高橋由香里1		株主総会のオンライン化に伴う変化と今後の展望
	山下奨1		旅行業界の未来
	山崎秀雄1	○	フィードバックに最適なメンバー間の関係性
	森永雄太1		コミュニケーション手段の違いとストレス
	高橋徳行1	◎	地域活性化活動における多様なアントレプレナーの存在
チャレンジ (同窓会) 枠	海老原崇2		旧経営者の影響と利益マネジメント
	桃崎有一郎1		日韓関係における報道の使命
	森永雄太 B	◎	DX 推進企業とジレンマ
	大野早苗 A	○	漁業支援の有効性を探る
	大野早苗 B		環境問題が注目され始めた時代に飲料容器を見直してみる

※1は専門ゼミナール第1部(2年次生ゼミ)、2は専門ゼミナール第2部(3年次生ゼミ)、AまたはBは縦ゼミ(2年次生、3年次生合同)

※◎印はブロック優勝、○印はブロック準優勝

### 1-3. 卒業論文報告会(人文学部)

人文学部 教授 嶋内博愛

2021年度の人文学部卒業論文報告会は、GSC (English) Capstone Project Symposium については1月28日(金)に、英語英米文化学科、ヨーロッパ文化学科、日本・東アジア文化学科の3学科については学科別会場で1月31日(月)に開催された。本報告書の執筆者は、各々について全体を俯瞰するような形で参加した。以下、その際に気づいたことについて記す。

従来これらの報告会は対面形式で行われ、2012年以降は一般公開もしていたが、新型コロナウイルス感染症の急激な感染拡大状況のなか、前年度に引き続き本年度も、ZOOMを用いたオンライン・ライブ形式での開催となった。参加者の中心はこれから卒業論文の執筆を本格化させていく3年次生で、その数は例年各会場100名を越える。本年度も、オンラインながら学科によっては100名以上が集まった。対面形式での開催が叶わなかったことは惜まれるが、感染拡大を防止するという観点からは、完全オンライン開催としたのはやむを得ない措置だったといえるだろう。

卒業していく4年次生にとって本報告会での発表は、自ら執筆した卒業論文の顕彰という意味合いがあるとともに、大学でのゼミナール活動の締めくくりともなる。報告者は、卒業論文ゼミナール及びCapstone Project Seminarの指導教授の推薦をもとに各学科・コースから選出される。推薦の基準は、提出された卒業論文の内容が学術的に優れていること、学科によっては、テーマの設定や分析の視点・方法などにとても独創的な点がみられることが考慮される。これは、主たる参加者である3年次生が自身の卒業論文と向き合うにあたり、柔軟な思考を獲得する一助となることを期待しての配慮でもある。

本年度の報告者はあわせて28名、これは例年並みの数だった。各報告者の持ち時間は限られているため、短時間でコンパクトに論文のポイントを伝えるべく、さまざまな工夫を凝らしたプレゼンテーションが行われた。報告者は、例年同様、事前にA4で3枚程度のハンドアウト(毎年度末に刊行する『卒業論文成果報告書』に収録される)を作成しているのだが、なかには、それとは別にこの日のプレゼンテーションのために準備したパワーポイントのスライドを用いる者も多数みられた。ハンドアウトが文字情報主体であるのに対し、発表用に準備されたスライドには、文字情報だけでなく写真や図表などもふんだんに用いられており、視覚効果を高めようと工夫した様子がうかがえた。従来人文学部にありがちだった、文字と声が主体で視覚によるインパクトに乏しいプレゼンテーションが、ヴィジュアルも重視するものへと急激に変化したことは、前年度のFD活動報告書にも記されている。その理由として、2020年4月以降、新型コロナウイルス対応のために授業だけでなく就職活動などでもオンライン上でのコミュニケーション能力が問われる場面が増えたことが影響しているのではないかと推測される。本年度も同様の傾向がみられ、新型コロナウイルスに対応していく際に否応なく迫られたものではあるものの、その結果FDの観点からみると好ましい効果が得られた点もあるといえそうだ。

質疑応答の時間配分には学科・コースによって個性がみられた。具体的には、複数の報告者にまとめて質疑応答するパターンと、各報告者の報告後に質疑応答の時間を設けるというパターンがあった。参加者に質問を促す工夫としては、ZOOMオンラインであることを活用したチャット機能の利用のほか、事前に質問用Googleフォームを用意するという工夫もみられた。そこからは、発表時間を確保しつつ報告学生と参加者とのあいだのインタラクティブな学修を促そうと、各学科・コースによって知恵を絞っているさまがみえた。

各報告は、3学科については日本語、GSC (English)については英語で行われた(Capstone Projectは英語による執筆)。今回選出された卒業論文及びCapstone Projectは、単一言語(現代日本語・英語)のみに収まるものはむしろ少数派で、資料として英語、ドイツ語、フランス語、韓国・朝鮮語、中国語、古文(古典日本語)、漢文(古典中国語)といった言語を用いたり、その言語にまつわる文化に軸足を置いたりするものが並んだ。GSC (English)の場合、日本語など英語以外の資料を用いた際にはそこで

出てきた概念を英語に置き換える必要があり、日本語執筆とは異なる苦労も垣間見えた。このように人文学部全体で、多言語・多文化という軸が重要性を増している状況がみえる。GSC 各言語プログラムが設置されて以来の成果が上がってきているといえそうだ。

なお、本年度の報告題目は以下のとおりである。

#### 【英語英米文化学科】

- 東京の言語景観——多言語音声案内の実態と課題
- 英国女性参政権運動と労働者階級女性——ロンドン東部女性参政権運動連合(ELFS)と女性社会政治連合(WSPU)との比較の観点から
- 入れられたフェミニズム——原作から実写版へのディズニープリンセスの変遷
- フィンランド教育から見る日本の教師の労働環境——今後求められる教師の働き方改革の課題と展望
- 日本人英語学習者の英語発音に対する苦手意識の原因
- 移り変わる「美白」メイクの流行に対して取るべき姿勢
- 「夢の国」の住人、キャストの民族誌
- 王座への渴望と残虐性——『リチャード三世』における人間的弱さへの対処

#### 【ヨーロッパ文化学科】

- 感染症と人類の移動手段——移動手段の進化は感染症拡大要因になり得るか
- 中世ヨーロッパの彩飾写本——受け継がれる伝統
- グリム童話集と異界——「異界」を示す語の比較から
- ドイツ語心態詞 *doch* と日本語終助詞「ね」の機能的類似に関する考察——『君の名は。』及び *Your name.*より
- 「幸福」の解釈とその考察
- エピクロス主義とアナキズム
- ボスニアは憎悪の温床であるのか——内戦の真実とは
- パリにおけるメトロ開業の歴史——メトロ計画と都市の発展

#### 【日本・東アジア文化学科】

- 戦国期の茶の湯道具が生み出す“結縁性”とその価値について
- 前方後円墳の形状に関する学説史の再検討と方位分布
- 『ファン・ジニ』ドラマ論——新たに描き出された黄真伊の姿
- イエズス会宣教師マテオ・リッチの儒教観——古代儒学思想から見える普遍的真実
- 『万葉集』巻九・一七五七番歌「鳥羽の淡海」について
- 澁澤龍彦の思想エロティシズムと初期作品『犬狼都市(キュノポリス)』について
- ヒット曲の歌詞に表現される人物像とことばづかいの関係——昭和と平成の歌詞分析を中心に

#### 【GSC English】

- *Yo-kai as a Coping Mechanism: The Case of Amabie Adopted as a Symbol for the COVID-19 Pandemic*
- *Interactions between Little People and Humans in Mary Norton's *The Borrowers* series: From the Perspective of Posthumanism*
- *Gender Equality: The Challenge in History and the Keys for Our Futures*
- *Agency of Stigmatized Female Sex Workers: As a Step Towards Gender Equality*
- *The Literature of Lee Hoesung: A Korean Settler on Imperial Japan's Sakhalin Frontier, "Back" to Japan, and Beyond the Nation*

#### 1-4. シャカリキフェスティバル(社会学部卒業研究発表会)

社会学部 教授 針原素子

社会学部では、2009年度から、卒業論文・卒業制作(2020年度からはGDSコース所属学生の卒業活動も対象)の成果を発表するための場として、シャカリキフェスティバルを開催している。本年度は1月28日(金)に第13回シャカリキフェスティバルを開催した。「シャカリキ」という言葉には、「社会学の力」という意味と「がむしゃらに頑張る」という意味がこめられている。また、競うというよりも、多様な成果をおたがいに披露しあう場という意味合いをこめて「フェスティバル」と名づけられている。

例年、シャカリキフェスティバルは、1号館の3つの大教室を利用して、対面で行われてきたが、前年度、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、初めてオンラインで実施され、本年度も引き続き、オンラインでの開催となった。ZOOM教室3会場を設け、それぞれ3部会ずつ合計9部会が開催され、卒業論文21件、卒業制作6件、あわせて27件の発表が行われた。

前年度、特定会場へ参加者のアクセスが集中し、ZOOM教室定員を超え、入室できないケースが発生したため、本年度は、あらかじめA会場、B会場は500名、C会場は300名と定員を増員し、大きな問題なく進めることができた。

また、このコロナ禍における学生側のオンライン環境への慣れ、習熟もあり、発表者も工夫を凝らした発表を行い、ZOOMのチャット機能を利用した質疑応答も活発に行われた。大教室で挙手して発言することに比べ、チャットでの発言の方がハードルが低いいためか、質疑応答は従来よりも活発になる傾向が見られた。発表内容の詳細に関わる質問や、調査方法、卒業制作の進め方に関する質問など、さまざまな角度から質問がなされ、それらに対して発表者が丁寧に答えていた。「何故、そのテーマにたどりついたのか」「どのように調査協力者にアクセスしたのか」といったテーマ選定の背景や、卒業論文の進め方のリアルな段取り、コロナ禍における調査の苦労話など、これから卒業研究に取り組む3年次生にとっても有意義な情報が交換された。

Googleフォームで提出された参加者のコメントをいくつか紹介する。例えば、「これから卒業論文を書くにあたって、卒業論文のイメージを持つことができ、良い機会になった」「分析方法やテーマの選定方法についての過程を知ることができたのがよかった」「自分が今まで興味を持っていた内容以外の発表も見られたことで視野を広げることができた」「卒業論文を書く中で、視点が自分の論文に関してや同じゼミの人の論文の内容に関することに狭まっていたことに気づいた。他学科の発表を聞くことで、世の中には様々な社会問題が存在しており、それに気付き考えるために知識をつけてきたことを再確認することができた」など、視野を広げ、卒業研究に向けての指針作りに大いに役立ったことが確認できた。

オンラインであったため、1～2年次生の参加者も多く、大学での学びのゴールをリアルに感じるきっかけとなった。4年次生にとっては、ゼミごとに自分たちの仲間の発表を応援し祝うリアルな場とはならなかったが、それを補うメリットもあり、卒業研究の発表の場として十分、機能したと評価できる。

2021 年度 シャカリキフェスティバル 発表タイトル

A 会場: 卒業論文(A-1～A-3部会)

A-1部会(卒論) コミュニティ 司会:菊地英明	A1	在日コリアン3世のアイデンティティ形成——様々な要素から見るアイデンティティの所在
	A2	SNSを通じたサードプレイスの活用
	A3	地域の観光開発と持続可能性——量の観光から質の観光へ
A-2部会(卒論) 文化 司会:人見泰弘	A4	2021年現在の若者の遊びから読み解く、遊びの社会的意義・役割
	A5	対抗文化である日本のHIPHOPと若者の社会意識の関連性
	A6	Z世代のDIY精神——ロックバンドにおけるDIY精神の変容を世代の観点を交えて考察する
A-3部会(卒論) 教育と格差 司会:庄司昌彦	A7	食料支援対策と健康格差——子ども宅食・フードバンクの現実と将来
	A8	教育選択におけるペタゴジー志向と階層の関係性
	A9	性教育を「恥ずかしい事」から「自分事」へ——女子大生を対象とするインタビュー調査を通して

B 会場: 卒業論文(B-1,B-2部会)・卒業制作(B-3部会)

B-1部会(卒論) SNS/推し文化 司会:南田勝也	B1	どのようにして私見は支持されていくのか——Twitterにおける炎上を事例に
	B2	Twitterプロフィール文の内容分析——アイドルグループファンにおける検討
	B3	多様な国の23人から聞くアニメオタクの意識と“推し”の在り方
B-2部会(卒論) インターネットメディア 司会:千田有紀	B4	インターネットにおけるイヌ・ネコ動画視聴要因の考察
	B5	ネットで投げ銭をする人は「何に」お金を出しているのか——ブイチューバーの分析を通じた一考察
	B6	マンガはスマホで読むものになってしまうのか——マンガ産業とメディアミックスの関係
B-3部会(卒制) 印刷メディアの可能性 司会:林玲美	B7	Spoiler——留学経験者による、留学希望者のためのオリジナルガイドブック
	B8	私が見つめた奄美大島——綺麗な自然の背景にあった人々の努力
	B9	月虹——ゴシック&ロリータ専門雑誌の制作と販売

C 会場: 卒業論文(C-1, C-2部会)・卒業制作(C-3部会)

C-1部会(卒論) 価値観の変化 司会:松井隆志	C1	ポストモダンと東京オリンピック
	C2	「希望格差」を超えた21世紀社会へ——希望とライフコースの関連についてのパネルデータ分析
	C3	「毒親」言説からみる日本の家族観の未来
C-2部会(卒論) 社会参加/語り 司会:永田浩三	C4	買い物からはじまる政治参加——産直運動に携わる新日本婦人の会会員への調査より
	C5	後世に戦争を伝える絵画の意義——原爆の図と丸木美術館から読み解く
	C6	沖縄県を舞台に、これからの平和教育について考える
C-3部会(卒制) 映像メディアの活用 司会:粉川一郎	C7	ゲイジュツは「不要不急」ですか?
	C8	フィルターバブルについて学べるオンデマンド教材
	C9	白馬の魅力を探る——高校魅力化プロジェクトを通して

## 2. 特色ある授業科目

### 2-1. 特色ある授業科目(経済学部)

経済学部 教授 山崎秀雄

#### 1. アクティブ・ラーニングとオンライン授業

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、本学でも 2020 年度に続き、2021 年度の特に前学期授業は、多くがオンラインでの実施となった。まずはオンライン授業の円滑な運営にご尽力くださったすべての関係者の方々に、心から感謝の意を表したい。

オンライン化が難しい授業の1つがゼミナール(ゼミ)であろう。「アクティブ・ラーニング」の重要性が指摘され、大学のゼミにもその要素が求められるようになって久しい。文部科学省(中央教育審議会)は、アクティブ・ラーニングを以下のように定義している。

「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」

筆者が担当するゼミも、「教員による一方向的な講義形式の教育」は可能な限り減らし、ゼミの履修生の「能動的な学修への参加」を促すため、「グループ・ワーク」中心の「課題解決学習」等を活動の軸としてきた。他方、上記の定義に「体験学習」や「教室内」といったキーワードが含まれることから、基本的にアクティブ・ラーニングは、キャンパス内外でのリアルな授業が想定され、オンライン授業はほぼ想定されていなかったと考えられる。

加えて筆者は、ICT に関する知識もスキルも乏しいため、従来行っていたアクティブ・ラーニング型のゼミをオンライン上で再現するのは容易なことではなかった。そのため「この程度の工夫なら皆やっている」という内容で甚だ心苦しいが、以下ではそうした筆者が、本年度前学期の2年次生と3年次生のゼミにおいて、オンラインでのゼミ活動を文字通り「模索」した様子をお伝えしたい。

#### 2. オンラインでのゼミ活動の「模索」

筆者が担当するゼミでは、例年、前学期は経営学に関する専門書の輪読を行い、後学期は学生たちがその内容に基づくテーマを設定し、グループでの自主研究を行っている。自主研究の成果は、ゼミナール対抗研究発表大会もしくは経済学部学生研究奨励論文にエントリーし、発表することを目標としている。

オンライン授業になる以前の輪読は、「ジグソー・メソッド」と「ワールドカフェ」をミックスした独自の方式を用いていた。例えば5章構成の文献を15名のゼミ員で輪読する場合、各章に3名ずつのレポーターを割り当てる。ここまでは通常の輪読と同様の形式であるが、ゼミの時間にレポートをさせる際には、①各グループにレポーターが1名ずつ入るように、15名を5名1組の3グループに分ける。②レポーターは、短いアイスブレイク(ゲーム等)を行った後に、担当章のレポートを行う。③レポーター以外の学生は、説明を聞きながらホワイトボードにその章の内容をまとめていく。④レポートが一通り終わったら、レポーターは他のグループに移動し、レポーター以外の学生からホワイトボードにまとめられたその章の内容について説明を受ける。その際、レポーターは質問等を適宜行うことで理解の確認に努める。

⑤これを2回繰り返す、その章の内容をおおむね全員が共有した後に、⑥教員が全体のまとめを行う、という方式であった。

通常の輪読では、どうしてもレポーター以外の学生の参加意識が薄くなりがちで、内容の理解が深まりにくいという問題があった。この問題への対応策を模索するなかでこの方式に辿り着いたが、他方でこの方式は対面でのゼミが前提であった。これに近い輪読をオンラインで実施するために活用したのが、ZOOMの「ブレイクアウトルーム」とGoogleの「スプレッドシート」であった。

具体的には、上記の②の工程をブレイクアウトルームで行い、③の工程にスプレッドシートを活用した。ただし③の工程に関しては、スプレッドシートの特徴を活かすため、グループで話し合いながら内容をホワイトボードにまとめるのではなく、図表1に示すように、「今日のパートが最も言いたかったこと」「新たに知り得たこと／気づいたこと」「疑問・質問」の3点について、個人でシートに書き込む方式をとった。

もっともこの方式では、学生は早く記入した者の内容を書き写すこともできる。この点への対応策として、事前に学生には、全体のまとめの時間にスプレッドシートを改めて共有しながらランダムに質問することを伝えた。

図表1 実際に2年次生のゼミ使用したスプレッドシートの一部

Q1. 今日のパートが最も言いたかったこと	Q2. 新たに知り得たこと／気づいたこと	Q3. 疑問・質問
1. 実データに基づいた、VUCAの時代に合った形でアップデートする必要がある。	日本の多くの企業がチームの機能不全に陥っている	リモートワークによる影響で逆にコミュニケーションを取った場面もあるのではないか。
2. 日本の職場の現状(VUCA)とその現状に合った形でアップデートをする必要があるということ。	日本は熱意溢れる社員の割合が6%しかないということ、オフジョブコミュニケーションが多いことが高業績に繋がること	オフジョブコミュニケーションがしにくくなっている頃にチームワークを高める手段はないのか
3. VUCAの時代でチームの機能不全を克服するためにチームをアップデートする必要がある。	イフ・リ・ジョブのコミュニケーションが業績に影響を与えているということ。	イフ・リ・ジョブでの上司との関係性・コミュニケーションや早い環境などが業績アップに繋がるのか。
4. VUCAによりチームの機能不全が発生しており、本書ではチームワークについての考え方を実データに基づきながらVUCA時代に合う様アップデートしていく	日本の熱意溢れる社員の割合がワースト8位と想像以上に低かったこと。	最近の職場は職務の多様化から部署を超えて協力することと聞くので半径3mのチームは少しせまいのではないのか
5. VUCA時代の今、「チームワーキング」という考え方をすべての人々が持つ必要がある。	現代社会がVUCAの時代と言われている、この時代では既存の「チーム」についての考え方がうまく回らず、「チームの機能不全」が生じていること。	チームワーキングの考え方をいかにVUCA病を克服する必要があるのか。
6. 実データに基づきながら、VUCA時代に合った形でアップデートをする必要がある。	現代社会はVUCA病という時代。働きがい、モチベーションの問題は半径3メートルで起きている職場の問題とつながっている。	飲み会以外でのオフジョブコミュニケーションの方法がわからない。
7. VUCAに対応したチームのアップデートが必要である	現代社会はVUCA病の時代であり、今は昔に比べてチーム力に欠けている	飲み会などに対して消極的な若い世代にとって、代わりに「コミュニケーションは何なのか
8. チームが機能不全に陥りがちなVUCA時代において、それに合ったチームワーキングの考え方を実データに基づきながらアップデートする必要があるということ。	オフジョブコミュニケーションを行っているほうが業績が高いということ。飲み会などはあくまで息抜き的な要素としてしか考えたことがなかったため。	「あの人の仕事をするんだっけ症候群」は、人材の派生ワークの促進などのいわゆる時代の進展（いわゆる不可逆）によって生まれてしまう症候群であるが、その具体的な弊害は？
9. チームワークについての考え方をデータを元にVUCAの時代に合った形でアップデートする必要がある。	管理職、リーダー研修は盛んに行われている一方で全ての人に向けてチームワークについての研修や取り組みを行っていない企業	チームワークについての取り組みをしている企業はどのようになっているのか

### 3. 成果と課題

以上の方式で輪読を行ったことで、ゼミの時間内に、教員は個々の学生の理解度や疑問点をより細かく把握することができるようになり、よりの確なフィードバックを目指すことが可能となった。他方で学生も、自分の考えを文章で他人に伝えると同時に、他の学生の考えも文章で確認することができるようになった。筆者としてはその成果と認識しているが、例年よりも、輪読した専門書に対する学生たちの理解度は高く、また、そこから感じ取った問題意識も明確で、その後の自主研究のテーマ選びや実際の研究の進み方もスムーズであったという印象を持っている。

実際、12月11日に開催されたゼミナール対抗研究発表大会では、2年次生のゼミも3年次生のゼミも、それぞれ出場したブロックで準優勝をいただくことができた。また本稿を執筆している12月末の段階で、2年次生のゼミが3編、3年次生のゼミも3編、経済学部学生研究奨励論文にエントリー予定の論文がほぼ完成している。

今後はオンラインでゼミ活動を行う機会は減っていくと予想されるが、2020年度と2021年度の経験で得た知見やノウハウは、対面でのゼミ活動でも大いに活用していきたい。他方でゼミ活動に関しては、オンラインでの実施はやはり制約や限界の方が多いと感じている。特に同じ空間をリアルに共有できないことで学生間の距離が縮まりにくい(あるいは、縮まっているのかもしれないが、教員がそれを認識できない)点は、本年度の後学期から対面でのゼミが再開された際に痛感した。

大学におけるゼミ活動は、専門知識への理解を深めることのみならず、同じ専門を学ぶ仲間との関係を深めることも、重要な目的であると筆者は考えている。2020年度と2021年度の経験からは、後者の目的に資するようなオンラインでのゼミ活動を明確に見出すことは、残念ながらできなかった。この点に関しては、他の先生方(とりわけ ICT への造詣が深い先生方)からのご助言を賜ることができれば大変有難いと考えている。



## 2-2. 特色ある授業科目(人文学部)

授業と並走する英語動画視聴報告(授業外自主活動)のこころみ

人文学部 教授 直井一博

2020 年前学期、新型コロナウイルスの感染拡大により、本学の全授業がオンライン授業に移行した。ライブ配信、オンデマンド配信、課題提出方式のいずれかで、正課と同等の内容を提供実施する。多くの先生方同様この状況でできること、できないことを峻別しいつまで続くかわからないオンライン授業が走り出した。

端末画面と英語テキストを見て、聞こえてくる音声を聞き自分でも声に出すところは声にする。これだけではいかにも単調になりがちであるため、学習活動の合間に「小休止」、「気分転換」、「一息」などと短編英語動画を紹介するのが始まりである。

ソースは Facebook の Watch というコーナーに日々アップされる短編動画(映画クリップ)である。映画の1シーンもあれば、トレーラーもある。後者は「是非見てね」と誘うものであり、関心を惹くようにできている。その他、①長すぎず(2～3分が程よく、4分超えは長く感じる)、②暴力や性描写が過度のものを外し、③英語も見てストーリーを追うのに複雑あるいは速過ぎないもの、また、ホームビデオ投稿などによる、④誰でも興味を持ってしまう小動物、飼い犬や飼い猫描写、⑤幼少時を思い出させるような乳幼児の珍奇ではほほ笑ましい言動、などの英語動画の URL を ZOOM のチャットボックスに貼付けて、各自の端末で鑑賞するように紹介した。

本取組みが思いのほか好評で、意外にも新鮮な興味を掻き立てた。プラットフォームとしては Facebook のみならず YouTube、Instagram などにも飛び火していった。観て楽しむ活動をそのままにせず、「聞き取れた英語表現1, 2」、「タイトル(日/英)をつけるとしたら」、「英語で不明な点など」を動画観賞後にアンケートで回答させる「報告シート」(<https://bit.ly/3nKywjF>)なるものを作成し、読書マラソン形式でどんどんと報告記録が蓄積される活動となっていった。履修生には、授業内でも紹介するが、授業外の隙間時間、あるいは「気分転換に」自由に観て報告してほしいと担当している全授業で呼びかけた。授業の一部として、閲覧回数を各自の平常点と読み替える、と周知してから報告の件数がどんどんと伸びていった。

以上の経緯に半学期ほど費やした 2020 年前学期後半には、本取組みが軌道に乗り始め、好ましい形でルーティン化していった。前学期末に集計すると、報告件数が 500 を超えるクラスがでてきた。授業開始から終了まで一貫して本取組みを取り入れることができた 2020 年後学期、2021 年前学期のクラスごと総報告回数をまとめたものが、表1である。報告件数が 1000 を超えるクラスがあったのには私自身も驚いた。本取組みの途中では、動画の閲覧回数と同様に学生自身が動画を紹介した回数も平常点へ含めることを伝え、学生間での動画紹介も促進させた。

表1 2020 前学期と2021 後学期の動画報告回数

2020 後学期 クラスタイプ	報告数	2021 前学期 クラスタイプ	報告数
クラス A 英語専攻2年 (N=19) 必	342	クラス F 英語非専攻2学年 (N=28) 選必	1,116
クラス B 英語非専攻2年 (N=29) 選必	774	クラス G 英語専攻2～4年 (N=20) 選	718
クラス C 英語専攻2～4年 (N=19) 選	380	クラス H 英語非専攻1学年 (N=25) 必	834
クラス D 英語専攻2～4年 (N=20) 選	316	クラス I 英語専攻複数学年 (N=14) 選	518
クラス E 英語非専攻1年 (N=25) 必	1,051	クラス J 英語専攻2学年 (N=14) 必	942

各担当授業で筆者が紹介したビデオの内容及び URL などを別箇所 (<https://bit.ly/3qaiXCg>) に記載したため、ご覧いただければ幸いです。また最後に各授業で学生から寄せられた報告内容のごく一部をご覧頂きたい。雰囲気と内容をお図りいただけるものと思う。

「学生からの反応の実際の様子」

動画のタイトル	タイトルをつけたら	自由記入欄	聞き取れた語句 1	聞き取れた語句 2
ねえ、なぜ、なんであんなに可愛い犬とバイバイなの？	犬別れに泣く少女	泣きながら可愛いと言っているのが可愛かったです。犬にまた会えた時の少女の笑顔に癒されました。	puppy	adorable
おっちょこちょいなんですが何か？	ドジな女性の恋愛	美男美女でドジな女性と振り回される男性がだんだんお互いときめき合うのがおもしろかった。	happen to me	stay away from me
「How do I?や Why am I ~? は日常会話で使えるのではないかと思ったので使ってみたい」	ZOOM でのトラブル集	これもコロナウイルスの拡大により、生じた出来事の1つであると感じた。ズームでのあるあるネタや面白ネタも最近では見かけることが多くなった。カメラをオンにしたまま寝てる生徒？がいて猛者過ぎると感じた。	detention for all	resume class
Mamesuke -Shiba Inu & Japanese Sweets-	Mamesuke loves Amanogawa	天の川というお菓子がゼリー状で作られているのを初めて知って食べてみたくなったのと、寝ているまめすけが可愛くて癒された。	remove from the mold	name after
ちびっ子たちの恋のゆくえ。若いなりに意識します。	Children in love	単純にませていると感じました。日本の子供よりも自分の素直な感情を表現できてすごいと思いました。	girl friend/marry/kiss/ring/beautiful	boy friend

セリーヌ・タンちゃん(9歳)の堂々の歌唱力。	まだ幼い子供がプロ顔負けの歌唱力を披露している。	初めの自己紹介などの時間は、まだ幼く話し方などもかわいらしいなと思ったけど、歌い始めたときにそんな印象は吹き飛んで、思わずその歌唱力に引きずり込まれてしまった。／今回も早口で聞き取れなかった。男の審査員の人何か質問をして、その返答を聞いて笑っていたがなんという会話をしたかがわからない。	I'm gonna be singing	when did you realize the you have a great singing voice
日本食は大好物?! オーストラリア人と日本人が24時間食事を交換してみた	異国の食事	率直な感想を言ったり、良いところを褒めたり、時には工夫して美味しく食べられるようにしているところがとても良いと持った。私はベジマイトをパン一枚分食べられる気がしないからオーストラリアで生活できないなと思った。	yummy	melted
アメリカでアジア系移民が子供に医師になれというわけ。「人助け」は不幸な副産物? 皮肉ですが笑ってしまう。	金の為に命を救え!	社会の闇を批判する、皮肉交じりで魅力的な話しぶりが、非常に魅力的で引きこまれた。	Asian parents wanting thier kids to be doctor.	My mom can have an arrow going right through her.
セリーヌ・タンちゃん(9歳)の堂々の歌唱力。	American dream	授業で観たものを再び視聴したが何度観ても圧巻される。アジア系のこどもが大勢の人から拍手喝采を浴びて堂々と歌っている。その様子を見た母親も涙を流している。人種の垣根を越えたこの会場の中が、差別や偏見のない理想の世界であるように感じた。	I'm guessing your parents loves Celine and Dion	When did you realize that you had a great singing voice?
ハリー・ポッターが聞き取れるようになる! 不死鳥の騎士団で英会話を学ぼう『Harry Potter・英語リスニング』	ハリーポッターのワンシーンより	Rupa 先生が文を区切って説明してくれたのでとてもわかりやすかった。	Working hard is important but there's something that matters even more, believing in yourself.	Every great wizard in history has started out as nothing more than what we are now, students.
ラプンツェルのワンシーンです。歌も好きですが、風景が特に好きです。	ラプンツェルの代表曲	ロマンチックで心が落ち着くようなメロディーでとても気に入った。歌詞を観ながら聞くといつもよりも感情移入できるような気がした。	Now I'm here, blinking in the starlight	all at once

## 2-3. 特色ある授業科目 (社会学部)

### 【ケアの社会学】

社会学部 助教 玉置佑介

2021 年度の「ケアの社会学」は、序盤、ZOOM によるオンデマンド講義とリアルタイム講義の併用で実施し、中盤に対面講義の機会を得られた。ただし、終盤は再度、オンデマンド講義とリアルタイム講義の併用となり、履修生には負担をかけることとなってしまった。

まず、オンデマンド講義の際は、ひとつの動画を約 15 分に設定し、講義資料(穴埋め式プリント)に即して4本から5本の動画を作成し、履修生の集中力の保持に配慮した。くわえて、具体例については PowerPoint 資料を別途添付し、視覚的効果の高い学修を意識した。さらに、各講義回においては補足資料を用いて、前回の講義を復習する機会を設けると同時に、高度な理論的内容に関するフォローも心がけた。つづいて、リアルタイム講義の際はブレイクアウトセッション機能を用いて、履修生間のグループディスカッションの機会を設けた。その内容としては、4回目、7回目、12 回目に設定していたリアクションペーパー課題について相互に討論を重ねることで、執筆内容の相互確認の機会を提供すると同時に、履修生間の相互コミュニケーションの機会を提供した(なお、講義終了後、有志の履修生にたいして雑談コーナーを設け、対面接触の機会の少なさを補足していった)。

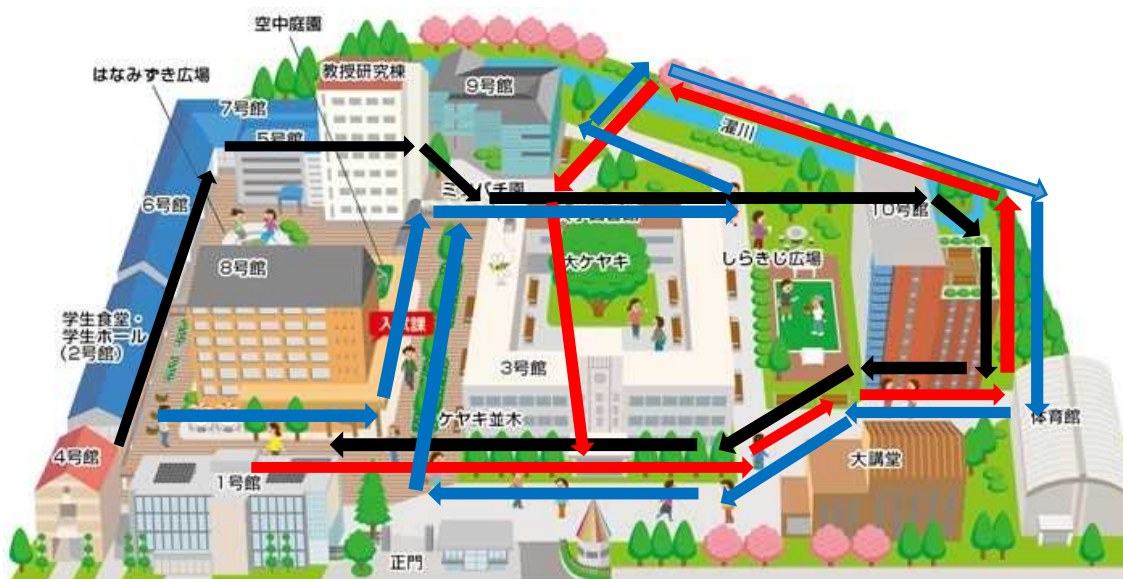
なお、本講義は、3回のリアクションペーパー提出(各回 10 点満点=30 点満点)と中間試験(30 点満点)と期末レポート課題(40 点満点[論理的一貫性 10 点・誤字脱字の有無5点・参考文献表の適切さ5点・引用の作法の順守 10 点・オリジナリティ 10 点])で成績評価を実施する旨、シラバスに明記した。なお、リアクションペーパーとは、課題が提示されるまでの講義において、履修生自身が考えたことを簡潔にまとめるものであり、Microsoft Word で作成し(書式自由)、提出は Google Classroom に添付ファイルの形で送信することとした(資料や講義動画のアップロード時には3Sの掲示機能を用いて周知徹底するだけでなく、別途、Google Classroom の一斉送信メールでも周知していった)。

くわえて、リアクションペーパーの注意事項として、①リアクションペーパーは、単なる感想では得点にならない。②自身の講義を受けての「考え」「意見」「主張」が展開されていなければならない。③文字数の制限はない。長くても構わないが簡潔に議論が展開されていることが望ましい。④誤字脱字や「てにをは」の不備、主語述語の関係が不明瞭のものは減点対象とする。⑤このリアクションペーパーは、必ず講義終了後から記述し始めることの5点を提示した。さらに、リアクションペーパーの提出後の翌週の講義回において 10 点満点者の講評を実施し、いかなる事由で満点となったのかを明示するだけでなく、他の履修生が講義を通じていかなる考えを持つに至ったのか、履修生全員に周知していった。また、履修生が各々提出するリアクションペーパーにたいしては、Google Classroom 上のコメント機能を用いて個別に講評していった。その際の指導内容は、【5点】の内容にたいして、「基本的な主張は伝わってきます。ですが、まだ感想に終始しています。その考えに至った理由・根拠を説得的に記述しましょう。」というコメントを付した。次に、【6点】の内容にたいしては、「リアクションとしておおむね成立しています。もう一歩、踏み込んで自身の主張を練り上げて下さい。その考えに至った理由・根拠をより説得的に記述しましょう。」というコメントを付した。また、【7点】には、「リアクションとしておおむね評価のできる内容です。惜しむらくは、より具体的な論点や自らの経験と絡めて、意見や主張が展開されていれば良かったと思います。」とし、【8点】には、「具体的な論点やご自身の経験が記述され、リアクションとして充実した内容になっています。何かプラスアルファで、新たな提案や着想、今後の見通し等について、記述があれば、より良いリアクションになると思いました。」と高得点の獲得への意識づけを徹底した。【9点】には、「優れたリアクションペーパーです。最終的には、より明確にご自身の言葉を概念化して記述されていれば、何も問題はありませんでした。引き続きよろしく願いいたします。」としつつ、満点の

【10点】には、「非常に完成度の高いリアクションペーパーになっています。引き続き、この調子で頑張ってください。」というコメントを付していった(以上のコメント内容は、基本的なものであり、別途、各履修生のリアクションペーパーの内容に即して、オリジナルのコメントも付している。(また、【5点】以下の履修生にたいしてはリアクションペーパーの注意事項について、コメント機能を用いて伝達を徹底した)。

以上までの内容としては、その他の講義と同様のものであり、特色のある授業科目としてふさわしい内容ではないものと考えられる。ただし、本講義は、当初、都内の障害者水泳の見学実習を予定していた。しかしながら、新型コロナウイルスの影響の長期化により、その見学実習は中止せざるを得なかった。本来であれば、本講義は「ケア」という具体的な対人援助場面を想定し、実践的に講義を展開していくものであったため、障害者スポーツの具体的側面として、実際に障害の当事者がスポーツに取り組んでいる場面を見学することによって「理論」と「実証」の相互往還のみならず、「理念」と「実践」に裏打ちされた「現場感覚で社会学を学修すること」を念頭に置いていた。また、見学実習に行く前段階として、履修生一人ひとりにたいして、実際に障害者水泳の指導においていかなる「ケア」「サポート」「アシスト」が実践されるのかを確認するつもりでもあった。具体的には、自由形の指導方法について、健常者へ教授する場合との相違点に着目しながら、身体接触をベースとした言語的コミュニケーションに頼らない指導の在り方を実践的に教授する予定であった。その代案として、講義担当者が実際の障害者水泳指導場面をビデオ撮影した動画資料を参照し、「ケア」「サポート」「アシスト」の具体的側面を解説しながら、講義の序盤で学修した理論的側面を実践的に理解する機会を提供した。ただ、それだけでは実際の「現場感覚」は身につかない。そこで、対面講義が可能になった2021年6月15日以降の講義内容を大幅に変更し、学内で「ケア」「サポート」「アシスト」の具体的側面を学修するべく「ブラインドウォーク実習」を実施した。そのルールは以下の通りである。

①2人一組(もしくは3人一組)になること、②どちらが先に目を瞑るのか、相手のサポートする役になるのかを決めること、③指定されたルートを周りながら、1人の時間を15分に設定すること、④3人一組のグループは目を瞑る役割1名に対して、2名のサポート体制とする。また、3人一組の各役割を10分にする、⑤階段や段差のある場所に行く際には、細心の注意を払い、相手に怪我をさせないように声かけや指示を徹底すること、⑥「みる」「きく」「しる」「する」の基本動作を意識しながら、実施することという6項目を念頭に置きながら、あらかじめ指定した学内のルートを周ってもらった。なお、そのルートの詳細と指示内容は次の通りである(なお、このブラインドウォーク実習においては、身体接触を伴うことを前提としているため、新型コロナウイルスへの感染の可能性を低めるために消毒と実施前後の手洗いを徹底させた[もちろん、マスク着用を必須とした])。



ルート A(赤い矢印のルート)は、1号館をでて、大講堂まで直進。体育館の方へ 10 号館の脇を抜けて進む。そのまま 10 号館に沿って池／川のあるあたりを慎重に通り返り、川の向こう側を歩いて図書館前の橋を渡る。その後、3号館の真ん中にあるケヤキを通り過ぎて守衛所の前に出てきて交替。ルート B(黒い矢印のルート)は、1号館をでて、突き当りの7号館まで移動。教授研究棟の裏側を通り、図書館脇をひたすら直進。しらきじ広場を横目に 10 号館の脇から 10 号館沿いを右回りに U ターン。大講堂から1号館前まで行き、交替。ルート C(青い矢印のルート)は、1号館をでて、右方向へ。メインストリートを左折して8号館を左に見ながら教授研究棟前で右折。そのまま図書館沿いを進み、3号館の角で左折して、川沿いへ向かう。川沿いを歩き高校・中学側へとつながる橋を渡り、高校・中学側を歩いて 10 号館裏側まで歩く。体育館脇を経て大講堂脇を通り正門前を右折して教授研究棟前で交替。

上記の3つのルートでブラインドウォークを実施しながら、視覚以外の感覚刺激がどのような感覚になるのか意識してもらおうと同時に、その経験をブラインドウォーク後に簡潔にまとめてもらい、リアクションペーパーの執筆及び最終レポート課題の具体例として活用してもらった。なお、ブラインドウォークにおいては、先導役(ケアする側)と目を瞑る側(ケアされる側)のどちらの役割を先にやるかで経験の内容が異なり、視覚による感覚刺激が経験の大部分をいかに構成しているのか実践的に理解してもらった。それと同時に、視覚に障害を有する当事者への「ケア」「サポート」「アシスト」の在り方として、ケアされる側への声かけはいかなるタイミングが適切なのかを具体的に把握してもらい、「ケア」がケアする側の一方向的な行為なのではなく、ケアする側とされる側の相互行為であることの意義を実践的に学修してもらった。

